

## 論文審査の結果の要旨

2022年7月17日

申請者： DL2014-111 趙 芸

論文題目： 東アジアにおける茶文化の伝播に関する研究

本提出論文は、中国、日本、朝鮮という東アジア地域における茶文化の生成と伝播および発展の過程を膨大な量の先行研究を渉猟することによって描き出すことを試みた研究である。茶文化には茶の生産・加工法、点茶法、飲茶の風習、茶碗や磁器の変遷ばかりではなく、茶文化の伝播と継承に関わった僧侶や文人、官僚たちの営為と彼らによって生み出された茶詩や茶書のような様々な芸術作品や文書も含まれる。本論文においては陸羽の『茶経』(780)や蔡襄の『茶録』(1049-54)をはじめとする中国の茶書に加え、日本および朝鮮における初茶書と考えられる栄西の『喫茶養生記』(1211)と草衣禅師の『茶神伝』(1828)に焦点を当て詳細な分析を行っていることが大きな特色のひとつとなっている。

茶史の先行研究の多くは中国と日本に関するものである。しかし、本研究では唐代における中国での茶文化の生成から宋・元・明代にかけての発展、平安から鎌倉時代における日本への伝播と日本における発展に加え、高麗時代の朝鮮への茶文化の伝播と発展の経緯を描いている。その上で日本と朝鮮の初茶書が著された時期の違いに着目し、これまであまり研究されてこなかった李氏朝鮮時代の『茶神伝』と『茶神伝』の基になった毛煥文「採茶論」および張源『茶録』を綿密に比較して異同を分析している。これにより明らかになった草衣禅師によるオリジナルな記述内容が当時の朝鮮における独自の茶文化の在り方の一端を示しており、当該分野における本論文の貢献として評価できると考えられる。

また『喫茶養生記』と『茶神伝』の間の様々な異同は茶文化の東アジア地域における伝播と受容の共通点と地域文化・政治状況の違いを反映しており、本論文の著者が茶文化の普及と発展に必要な5つの要素として提唱する政治的支持、経済の成長、社会・治安の安定、仏教(禅宗)および儒教、道教、道家思想、そして僧侶を中心とする茶文化の担い手、を導き出す重要な根拠のひとつとなっている。東アジア地域を視野に入れて茶文化の伝播における影響関係を比較し、その複雑さを描き出した点に本論文の価値を見出すことができる。一方で、近代における国境と文化の違いを自明視する傾向があるため漢字文化圏、仏教文化圏における茶文化の流通という視点がやや弱く、周辺地域を含めた文化的背景を掘り下げて考察するまでには至らなかった点が今後の課題として挙げられる。

口述審査は令和4年7月12日(水)にWebex オンラインにて実施した。申請者は研究目的と意義を簡潔にまとめ、予備審査における指摘事項に対して丁寧かつ効果的な回答を行い、所定時間内で説明を終えた。その後の審査員からの多様な質問にも的確に回答することができ、自身の研究の今後の課題についても明確な理解を示した。

よって提出論文ならびに口述審査も博士の学位に値するものと審査員一同判断し合格とした。

審査員(主査) 芳賀 浩一

審査員(副査) 王 秋菊

審査員(副査) 宮 偉